

軍医落合泰藏

田 中 助 一

私は学生時代の昭和七年から防長医学史の研究を始めたが、最初に調べたのは元萩藩医烏田家であった。烏田家の当主多門医師は、祖父良岱の門人中の唯一人の生存者である落合泰藏氏に御紹介下さったので、東京市杉並区のお宅に往訪した。落合氏は数え年八十四歳で、病臥しておられたが、快よく御引見になりいろいろ昔話をして下さいました。寝ておられる敷布団の下には備忘録が置いてあった。

落合氏は昭和十二年（一九三七）一月十八日に八十八歳で逝去せられたが、その当時私は日本赤十字社病院の耳鼻咽喉科に勤務中であって、治療主幹の岡部剛二博士より落合氏の御逝去と、同氏が日本赤十字社発展の功労者であることを聞いた。

その後日本赤十字社看護婦同方会の機関雑誌『同方』の編集者であった元事務主幹中村秀樹氏（陸軍一等軍医正）

より、「落合さんは非常に綿密な人で、陸軍の統計を見して良くわかるように何時も表で示されたので、『落合表の頭』^{かみ}と言って尊敬していました。それから石黒忠恵子爵の大きな功績は、落合さんの隠れた援助が非常に多いのです」とうかがった。

落合泰藏は嘉永三年（一八五〇）七月十五日に長門国大津郡三隅村豊原の天台宗正学院住職中原俊応の二男として生まれ（兄は中原復亮）、幼名を朝之亟と稱した。安政四年（一八五七）五月五日同地の医家落合秀哲の養子となり、後に泰藏と改めた。

幕末多事の時にあたり、十二歳頃より剣術・柔術・兵術の訓練を受け、十五歳の時銃隊に編入せられた。四境の役に際して周防大島郡に急行し、幕兵および松山藩兵と戦い、藩主より賞賜せられた。

慶応二年（一八六六）養父の命に従って萩に出て、藩医（外科）烏田良岱の門に入って医学を学び、その傍ら土原の門田塾^{もんてん}に通って漢文を学んだ。この塾で学び名を成した人に陸軍中将長岡外史・医学士半井英輔（軍医、医学校

長)・医学士山根正次(代議士、医学校長)等がいる。

明治二年(一八六九)長崎医学学校に入学、四年再び烏田の門に帰り、塾頭となった。

明治五年東京に出て、六月に陸軍軍医の召募試験を受けて合格し、軍医補となった。

明治七年二月佐賀の乱が勃発したので出張し、ついで台湾征討のことが起こり、蕃地事務都督府に属して医事を管理した。

明治十年二月西南の役が起こるや、九州各地に出張、もっぱら前線の医事に関与し、功績が多かった。この戦争が終ると、ただちに東京に帰り、征台並びに西南の役における貴重な経験を生かし、陸軍野戦衛生隊の規範たるべき『陸軍野戦衛生隊勤務令』を書き上げた。これによって陸軍の野戦衛生業務が統一せられた。落合の用意周到で綿密なことは、ひとり衛生事業だけでなく、陸軍に関する諸般の事務の処理にも功が多かった。

明治十六年五月二十五日『漢洋病名対照録』を自費出版した。この本は今日でも日本医学史を研究する者にとって座右必備の参考書であり、好評を博して三版を刊行した。

明治十八年六月『明治七年征蛮医誌』を編纂し、二十年に出版した。これは我国における軍医の書いた戦記のはじめである。

明治十八年から二十年にかけて日本赤十字社の設立があつて、落合はその設立業務に関与した。また篤志看護婦人会の設立にも尽力した。

明治二十七年、八年の日清戦役にも、大総督彰仁親王に随つて従軍し大陸に渡つた。

明治三十三年七月十一日陸軍軍医監(少将相当官)に累進し、三十七、八年の日露戦役には、乃木希典大將が司令官であつた第三軍の軍医部長となり、とくに大將の健康に關して配慮したと伝えられている。

明治四十年十一月予備役に、四十三年四月後備役に編入せられた。最終の位階勲等は従四位勲二等功三級であつた。陸軍退官後は八十歳に至るまで、もっぱら日本赤十字社の事業に尽瘁した。

大正六年頃には渋谷に住んでいた関係で、豊多摩郡医師会名誉会長になつたこともある。

大正九年五月十八日『明治七年生蕃討伐回顧録』を自費

出版した。

右のほか『薬名彙集』・『明治三十七、八年戦役第三軍に於ける死傷其他の統計衛生機関の作業表及配置図』等の著述がある。

東京青山斎場における葬儀はきわめて盛大で、神奈川県鶴見にある曹洞宗大本山総持寺に葬られた。戒名は樹徳院泰嶽忠誠居士である。

(山口県萩市)

田代三喜の『三帰廻翁医書』

小兒諸病門について

広田 曄子

田代三喜(一四六五〜一五三七)は室町時代の医師で、一四八八年に渡明して月湖について金元医学を学び、一四九八年に帰朝した。帰朝後は古河を中心に民衆の医療に尽くしたといわれる。

三喜の著作集『三帰廻翁医書』の小兒諸病門は、日本における最初の小兒科の専門書と思われる。日本の小兒科領域の医学の歴史は『医心方』、『万安方』、『福田方』、『三帰廻翁医書』といった具合に辿れるが、前三者はいずれも全書の中の小兒部門である。

『三帰廻翁医書』は『福田方』より百数十年後に著された。『福田方』もカナまじり文で書かれていたが、本書も同様である。小兒諸病門には出典の記載がないのがそれまでの医書の小兒門と違うところである。しかしその内容は